



始





特 274
202

V
101



庫文館文博

— 1 —

ぶ叫にアジア

著平曉井土

館文博



再版序

本集は昭和七年即ち滿洲事變勃發の翌年に刊行された、其後滿洲國の建設があり、日本の國際聯盟脱退があり、やがて支那事變の勃發があり、しかして今大東亞戰正に關である。原版に削除或は追加を施して、こゝに『アジアに叫ぶ』の改版を刊行する事は今日の時世に不順應ではなからうと思ふ。

昭和十八年三月

仙臺に於て

土井 晩翠

序

東西諸聖典の共通に説くところ所謂「諸宗教の公約數」は暫く別として純詩界の上から見ると、西歐最大のホーマスは『女神よ歌へアキレスの怒』とイリアットの劈頭に歌ひ、東亞最古の詞華集は『文王上にあり、ああ天に昭か』と大雅の第一行に書く。唐の最大詩人杜甫、宋の最高天才蘇軾共に佛典の讚美者である。西歐近代第一の詩聖ゲーテがエックマンに「一切の偉大なるもの優秀のものは皆悉く靈の恵み」と話したのをウインデルバンドは「アレル・ディン」の中に引用してゐる。

今日思潮のうづまき流るる中に唯物論及び之を基とする議論の

猖獗であるのは西歐物質文明瓦解史上の當然の數かも知らぬが世道人心の上に最も有害なるものは是である。唯物論は一切の神聖なる事物に對する反抗である。

私の處女作三十年前の「天地有情」の序の初めに「或は人を天上に揚げ、或は天を此土に下す——詩の理想は即是也」と書いたが今でも斯く信じてゐる。

東亞の風雲まさしく急に、生民の休戚の決する處、天命人心去就離合の危機に當り、此一小詩集の公刊に際して讀者の反省を願ひたい。

昭和七年夏

仙臺に於て 土井 晚翠

目

次

第一部

光は東方より……………三
 造れ聯盟——アジアのそれを……………七
 中華民國の有識者に寄す……………一〇
 奉頌明治節……………一三
 仁本……………二〇
 旭日旗……………二二
 太平洋……………二四
 陸軍中將黒澤準君……………二六
 陸軍大將松川敏胤君……………三六
 荒城の月……………四八
 ヘルギリウスの二千年祭にイ……………

タリヤを思ふ……………五〇
 四十三字歌……………六七
 海外拓殖の歌……………七二
 満洲の白頭山……………七五
 廟行鎮の三十六英雄……………七九
 護國の靈……………八五
 伊達政宗卿……………八七
 豊太閤……………八九
 第二師團出征……………九二
 満洲獨立守備隊の歌……………九五
 日本陸軍の歌……………九九
 大楠公讃頌……………一〇三
 赤穂義士の讃……………一〇四

吉田松陰……………一〇九
北畠顯家卿六百年祭……………一一〇

第二部

日本精神の歌……………一二九
武士道の精華……………一三三
奮へ國民……………一三三
起て、日本國民……………一三六
理想日本……………一三九
正義の鋒先……………一四三
大東亞戰爭序曲……………一四四
少年航空兵……………一四七
香港陷落……………一四九

第三部 — 三大海戰歌 —

A B C D 包圍陣敗る……………一四三
シンガポール陷落……………一四四
樂土を拓け……………一四九
林子平先生を偲ぶ……………一五二
鈴木三守英靈頌……………一五三
歌劇元軍覆滅……………一五九
日本海々戰の歌……………一八〇
米國太平洋艦隊の撃滅……………二二〇

第
一
部

光は東方より

神武神聖わが皇祖、
日本の基を建ててより、
聯綿として傳はれる
二千餘年の帝國よ、
皇統一つの系にして
一百二十四代算ふ。

明治大正さきにたち、
昭和つづきて新たなる
使命東の空に曙け、

妖霧拂ひて瞳々と、
昇る旭日の旗風に、
先づ滿蒙の草靡く。

世界の陸の三が一、
四千萬方キロメートル、
世界人口の半越す
十億の民 大亞細亞、
亞細亞ひとつに結ぶ時、
普天の下に敵あらじ。

王道廣く施して、
四海の幸を求むべき

理想に盡すわが使命、
鏡と玉と劍との
三種の神器いや高き、
わが象徴の尊としや。

鏡は照す身の誠、
玉と劍は仁と勇、
恩威ひとしく萬邦に
垂れて榮と平和とを
内と外とに來たすべく、
わが任重し、道遠し。

あゝ光明は東より、

光めざむるあけぼのの、
太平洋の波のうへ、
日本の富士を仰ぐとき、
希望は常に若やがむ、
四海の平和わが理想。

造れ聯盟——アジアのそれを

造れ聯盟——アジアのそれを—
西は黒海、ボスホラス、
東は扶桑、日の光、
南は赤道、燃ゆる波、
北はベーリング、凍る海、
その名を呼べば聯想は
雲の如く湧き起る—
偉大、光榮、莊嚴の
五千餘年の史を残す
アジア新たに奮ふ時、

世界の覇權を制すべし、
造れ聯盟——アジアのそれを！

大聖釋尊生れし印度、
大聖孔子生れし中華、
大聖キリスト生れしユデア、
二千餘年の傳統の
文武二つを兼ね備ふ、
日本と親しく手を握れ！
世界人口の半越^{なかば}す
有色人種十億の
民悉く義に勇み、
アジア一つに結ぶ時、

世界の覇權を制すべし、
造れ聯盟——アジアのそれを！

中華民國の有識者に寄す

異邦異色の民族を

脚下に踏みし白人の横暴！

『白人ならずば人に非ず』

誇り狂ひし無上の横暴！

その横暴の代表者——

先には罪なき五千の民を、

黒龍江に沈めさりし

虎狼の國を、敵として

奉天遼陽沙河に破り、

日本海に最後に碎き、

有色人種十億の

上に光明齎らせる——

正しく世界史上の偉觀！

かくして印度の三億目ざめ、

かくして中華の四億もたてり。」

「獨立」叫びて揚子江畔、

白人逐ひて商權の

恢復遂げ得しその本いづれ？

聞かずや狡兒ベルンハルデイ、

『白人力を東亞に植うる

その策——日支の離間にあり」と！

區々たる小利をあげつらひ、
ヴェールをかぶる彼等の中傷、
離間の策に陥りて、

「排日國是」を叫びし迷！

あゝ大東の經綸の
千歳の策定むべき
今に當りて何にか迷ふ！
さめよ！中華の民衆四億！
血は水よりも濃しと知らずや！

・大正五年同文館出版早稻田大學教授原口
竹次郎君著「戦争か平和か」の第三六五頁。

奉頌明治節

明治節！明治節！

菊も盛りの明治節！

御苑の花も賤の庭の

花もひとしく薫る頃、

月は十一、日は三の

わが神聖の明治節！

八千餘萬のわが同胞、

丹心ひとしく思ひをこめて、

讃じ頌せよ 明治節！

讃し讃せよ 明治節！

明治の光り 大正に

更につらなる 昭和三年。

風も清らか 爽かの

此月此日 迎へまつる、

わが神聖の 明治節！

(天地の大靈あがめまつる

年のはじめの 四方拜、

神武天皇 樞原に

即位したまへる 紀元節、

日本のみかど うまれましし

よき日を祝ふ 天長節)

三大節に今に新たに、

明治節こそ 加はれこゝに、

讃ぜよ頌せよ わが明治節。

二千五百八十八、

わが皇統の つゞく年、

讃ぜよ頌せよ 此年此日。

明治天皇 みあれの此日、

きけ雲上に 天樂ひゞく、
見よ雲上に 瑞霞たなびく。

昭和の三年 此月此日、
尊し大帝 明治の記念、
近きに大典 迫りていたる。

昭和三年 千秋の賀、
昭和三年 大典の賀、
近きに迫る 近きにいたる。

あゝ 大典ぞ せまり來る、
千秋の鑑 遠き世の

あとにも 優れ 昭和の世。

西の都の いや高き
紫宸殿上 瑞雲の
たなびく明日は せまり來る。

千秋の鑑 遠き世の
あとにも 優れ 昭和の世
あゝ 日の本に 榮あれよ！

日本よ なんぢの使命は何か、
東亞の光り 四千年、
西歐の薫二千年。

これとかれとの融合の
天職天命 高きを思へ、
日本よ なんぢの使命をおもへ！

尊とし高し 明治天皇、
民罪あらば 天津神
われ咎めよの 大御言！

まさに百代 政治の理想！
東亞のむかしは 堯舜か、
西は聖帝 アウレリアス。

理想は無窮に世々の光り、

理想は「敬天愛人」——かくぞ！

理想を追ひ行け日本の民！

理想を追ひ行け 八千餘萬、

理想を追ひ行け 四海の友、

理想を追ひ行け 普天の子ら！

理想に殉じて光榮高し、

個人よ國家よ世界よ思へ！

天上はるかに 黙示は降る。

天上はるかに降れる黙示、
つつしみ拙き筆にしるさん、
昭和三年 わが明治節。

仁 本

(七書司馬法の第一章をよみて)

天に替りて無道を懲らす
降魔の利劍願くは
四海の民を安んじて
皇祖のあとに倣はんか、
あゝわが武士道世界の精華！

旭 日 旗

萬世一の系より始め、
金甌缺けざる歴史をつぎて、
旭日の如くに耀く日本、
旭日を象どる日本の國旗、
國旗を尊べ至尊のために、
あゝわが崇むる至尊のために。

二千の春秋東亞の隅に、
力を積み來て世界に進み、
旭日の如くにまばゆき日本、

旭日をかたどる日本の國旗、
國旗を尊べ祖先のために、
あゝわが敬ふ祖先のために。

文武の兩道琢きてやまず、
世界を惱ます妖魔に勝ちて、
旭日の如くにさやけき日本、
旭日を象る日本の國旗、
國旗を尊べ子孫のために、
あゝわが愛する子孫のために。

三種の神器にこもれる理想、
四海に布くべき使命を帯びて、

旭日の如くに榮ゆる日本、
旭日を象る日本の國旗、
國旗を尊べ世界のために、
あゝわが親しき世界の爲に。

太平洋

千秋萬歳 日本の岸を
洗ひて 太平洋こそ躍れ、
しづまる其時 鏡に似たり、
あらば銀浪 虚空に舞へる、
洋々たるかな 世界の巨海！

渺々漫々 幾萬渥、
はるかにはるかに 米大陸に
連り、あしたに紅日吐きて、
夕に彩雲焰と燃ゆる、

莊嚴無上の おほわだつみや！

なんぢの廣きに心を比べ、
四海の平和を理想となして、
あまねく世界の奉仕に勤め、
皇道 王道 行ふものぞ、
なんぢの主たらむ 太平洋！

(昭和三年)

陸軍中將黒澤準君

昭和の二年秋半ば、
歌にいみじき宮城野の
萩の錦は過ぎし夢、
金華松島鹽釜の
天を満たせる秋の香の
清き折りしも逝けり將軍。
東亞の海は和ぎたれど、
明日のみだれは測られず、
朔北或は荒るべくと、

後を劃し、たつやく 韜略の
深きを誰か探り見し、
運それ數奇、さくき 逝けり將軍。

時に利あらず驩行かず、
千古の憾英雄の
嘆またこゝに髣髴と
時世の上に譬へんか、
名劍匣に收まりて、
薫り残して逝けり將軍。

型を史上に求むれば
曲にくはしき周郎か、

文彩ひとし、朔漠の
秋を歌ひし風流や、
これ文、これ武、世に稀の
玉と碎けて逝けり將軍。

眸は澄める秋の水、
紅頬照りしいにしへは、
情天情地花にほひ、
月もゑみけん紫の
ゆかりのあとも一雙の
名を歌はれし逝ける將軍。

渤海の岸青島の

役の策略たゞ君に、
世界にあれし戦ひの
一脈こゝに傳はりて、
東亞の隅に旭日てる
旗を笑み見き逝ける將軍。

その大戦のあらし吹く
名残り黒龍波むせぶ、
流れ渡れば荒涼の
シベリヤ大野霜白し、
戟を枕の陣營の
夢いかなりし逝ける將軍。

北斗の高き天のもと、
コサツク萬騎一齊に
列を正してつゝしみて、
銀鞍白馬颯爽の
君の檢けみしを仰ぎけん、
跡今忍ぶ 逝ける將軍。

中央アジア跋涉の
むかしもよしや身ひとつに、
サマルカンドの月澄みて
荒れし都にてりし時、
蓋世の勇一場の
夢と知りしや逝ける將軍。

甲帳かもちやうあとに身を起し、
鷄林の地に咸興の
旅團ひきるしそもむかし、
風霜秋に冴ゆるとき
大陸遠くめぐらしし
深謀いかに、逝ける將軍。

蜂のしるしの校の中、
そだちし秀才幾千か、
文には樗牛、武には君、
嚴父の遺命重ければ、
劍つるぎとる身の道に入り、
天職とげし逝ける將軍。

一年の秋さきんじて、
海の英雄齋藤を
傷みし廣瀬河畔の地、
今またこゝに陸上の
英雄のあと風淋し、
しづかに眠れあはれ將軍。

玲瓏として微を穿ち、
深きにとほる一隻の
心眼いづくに類を見ん、
壽を永うせばいつしかは、
樞機の鍵を握るべき
身なりしものを、逝ける將軍。

麒麟の閣に影とゞめ、
黄金の印 廟堂に
重きをなさん君にして、
五十の齡今逝くや、
短しとこそ稱へざれ、
痛まであらめや、逝ける將軍。

幽と明との境すぎ、
神祕の領に悟るべき、
靈知を缺けるわれ人の
想ひいづくにさまよはん、
國に盡し、一塊の
英魂しづかに休め將軍。

群小蠅とむらがりて、
玉と魚目と混ずれば、
榮枯は遂に夢にして、
たゞ皇天の見るところ、
千歳の評定まらん、
笑みつゝ眠れあはれ將軍。

聞けり時計の秒の針、
動くたびごと坤球の
中に五十の棺埋まり、
上に五十の産衣増す、
生死は常といひながら
逝けりや今はた遂に將軍。

露は一叢の玉を布き、
清く涼しく身にしめる
風は北邙吹き去りて
煩悶煩惱人の子の
思ひしづむる秋なれや、
眠れしづかに逝ける將軍。

陸軍大將松川敏胤君

咽ぶやいか、廣瀬河波、
こよみの上に春はかへれど、
名残りの吹雪夜半にあらべる
わが東北の天のさびしき、
昭和三年三月七日、
逝くや敏胤松川將軍。

齡は七十古來にまれに、
名爵高きに到るとせんか、
見龍今はた故園に潛み、

勳業いみじき武臣の終り、
わびしや都の春にぞそむく。

明治天皇桃山に

しづまりましてこのかたに、
過ぎし十七春と秋、
春なほ遅き郷にして
今英雄の死をいたむ、
あなた名におふ千松島、
波のみどりはかはらねど、
潮の花は脆く散る、
こなた宮城野萩にほひ、
歌人の胸を悩まし、

あと今あれて香をとめず。

想ふ——將軍孤燈の下、
懷舊いくたび歐の中原、
ブランデンブルグ門高く、
リンデン街 道廣く
龍馬銀鞍風をきりし
大都の春のひとつ偶、
メツケル親しく手を取りて、
授けし兵機、更にまた
ただ心より傳へて來て、
心に受けし何ものか、
燃えたつ功名火の如く、

夜半に枕をけりてたちけん、
それも夢なり、月寒し、
わが窓夜半の月白し。

王師百萬海を越え、
遼陽、奉天、沙河の役、
歐亞にわたる赫々の
大邦の軍微塵とし、
世界の耳をそばたてし
高きいさをはたが手より、
人曰はずとも蘭の花、
薫りは隠しがたからん、
光沈まず、音絶えず、

將軍そゞろにほゝゑみて、
吟ぜしところ何ものか、
不才思ひをはすれども
夜半のともしび聲もなし。

ああ春遅く、羅浮の夢、
むすぶもよしな、雪残る、
月の光はほのかにも
笑はぬ枝にさえ照れば、
翠の羽の鳥啼かず、
玉の蓋はた玉の骨、
はた玉の膚いたづらに
ただ契るのみあすの春、

そのあす待たず君逝けり。

あゝ白梅の香の高き、
粧ひまたぬ尊しや、
晴れもよし、はた雨もよし、
くもりもよしや、世に媚ぶる
桃李のあとを習ひ得ず、
榮達もとより辭せずとも、
膝いたづらに屈せんや、
東北の天、奥羽の子、
傲骨遠く昔より、――
知己は薩南武人の典型、
川上將軍逝きてより、

伯牙の琴はさびしかりけり。

雲上の蓆 兵略を、

講ぜしあとも一片の

ほまれのあと、數へんか、

腰に紫電の劍を帯び、

身は青牛に跨りて、

洞天に入る微妙の趣味、

養ひ得けんそのむかし。

鹿門^{*}の庭いみじかりけり。

目をあげて見るおほやまと、

オクシデントはたオーリエント、

四海の潮 澎湃の

流よせ來て泡だてる――

左は共產無政の狂愚、

右は頑迷固陋の化石、

心にあらぬ矯激の

言語自ら欺きて

無知をひとしく陥る――

誰か政教の理を正し、

俗を厚うし風を化し、

天を敬して愛により、

王道民政ひとしく共に

兼ね榮うるを得せしめん。

皇國日本極原に

基定めしいにしへの、
光榮遠くかへり見る、
二千五百八十八、
年を數ふる邦ふるく、
命はあらたの今日にして、
萬民ひとしく法により、
法を立つべき時來り、
自由の聲は高けれど
天の偶風叫び、
不祥の雲の迷ふ時、
その時にして君逝くや。

青葉廣瀬の山と水、
仰ぎし俯せし同じ郷、
齡は後におくれたる
齋藤黒澤先に逝き、
君を迎ふる何の地か、
天か——想像その羽を
ひろぐるところ——千歳の
末に傳はるおほ御言、
民罪あらばあまつ神
われ咎めよとのたまひし、
至尊の御たま在天の
かたへに君の靈伏して、
奏するところ何事か。

英靈こゝに生るゝところ、
雄魂かれにすぎさるところ、
皆玄妙の機によりて、
終りはすべてに共に善けん。
生々の氣よ、寂滅の
相よ、ひとしく共に眞、
現世しづかに影消して、
將軍の魂遠く去れ。
あゝ一切は信にあり、
風は大澤の雲を駆り、
虹は半江の雨を截る、
來らんあすの望みより、

昭和の春はわかやがん、
昭和の春はほゝゑまん。

・少年時代に仙臺の岡鹿門の塾に在り。

荒城の月

明治卅一年頃東京音楽學校の需に應じて
作れるもの、作曲は今も惜まるゝ秀才瀧廉
太郎君。

春高樓の花の宴、
めぐる盃影さして、
千代の松が枝わけ出でし
むかしの光いまいづこ。

秋陣營の霜の色、

鳴き行く雁の數見せて、
植うるつるぎに照りそひし
むかしの光今いづこ。

いま荒城のよはの月、
變らぬ光たがためぞ、
垣に残るはただかづら、
松に歌ふはただあらし。

天上影は變らねど、
榮枯は移る世の姿、
寫さんとてか今もなほ、
あゝ荒城の夜半の月。

ヴイルギリウスの二千年祭
にイタリヤを思ふ

空ほがらかな秋日和、
西吹く風のしたしみに、
橘柚レモンのかんばしき、
南歐の國なつかしむ、
秋十月の十五日、
ヴイルギリウスの生れし日。

遠し正しく二千年、
其土のうめる大詩人、
けふイタリヤは祭るべし、

美なるイタリヤいにしへの
勇武竝に豊沃に
すぐれし國のヘスベリヤ。

トロイを落ちて再興の
偉業開けるエイニアス、
偉大のローマ帝國の
祖先となりし英雄を
歌へる詩人皇天の
命に應じて生れしや。

文明の史の危機に立ち、
世々の興亡顧みて、

うづまき荒れし内亂を
治め鎮むる統一を、
大シイザアの系統に
求め歌ひし大詩人。

地中海その池として、
三百二十凱旋の
ほまれのローマ軍團の
進むが如き音律に、
イタリアの美を、光榮を、
ローマの大を、文明の
光りひろむる天職を、

歌ひ祖先の美なる徳
（其徳ありてたふれたる
狂瀾再びかへるべき）
讀して民に向上の
道を示せし大詩人。

北イタリヤのマントウヴァ、
呱呱の聲あげ幾度か、
治亂の波に浮しづみ、
光と暗と入りまじる、
五十幾年數奇の命、
大雅の韻を調べ得て

終りは南イタリヤの
ナボリの端のボジリッポ、
流風餘韻千歳の
末にほへる名を戀ひて、
わが青春のいにしひに
その跡とひし旅も夢。

『東海遊子吟』の題

あゝ濃藍の南の海、
風はしづかに波和ぎて、
暮れゆく空に縹渺の
姿ヴェスピオ吐く煙、
「誰の思ひの影とせん」
しか歌ひしもわかき春。

あゝわかき春 『九環の
寶帶光りてらすとも
君の双頬くれなるの
にほひにしかず』 劍南の
句に共鳴のいにしへや、
其の青春は過ぎされど――

（南宋の大詩人陸放翁）

美に光榮に一切の
すぐれしものにあこがるゝ
一念齡と共に増し、
夢寐に忘れぬ南歐の
詩美のイタリヤ今日こゝに、
ヴァイルギリウスの名に思ふ。

嘗て『艶美の天恵は
禍なり』とフリカヂヤの
嘆せしところ、一望の
野はひなけしの眞紅燃え、
むかしの跡の荒廢も
至上の韻致——今おもふ、
聯想更にイタリヤの
黒衣宰相ムソリニに——
世界にあれし大戦に
つゞく怒濤の凄まじき、
國を沈めんばかりなりし
あとを治めし偉なる材。

彼また思を東方に、
會津若松白虎隊——
時の理想に身を殉し、
明治維新の史にかをる
若くて美なる壯烈の
あとを讀して贈り來し

記念のはしら、大ローマ、
鷲をきざみて高く立つ、
碑面のS P Q R、
二千餘年を思ふべし、
東と西と感激に
永くイタリヤ忍ぶべし。

あゝ感激よ是ありて
浮世の沙漠花を見る、
血汐の脈の共鳴に
西と東と調一つ、
そのオーリエントいにしへは、
神祕の海の岸遠み――

黄金瑪瑙碧玉と
花と錦と眩惑の
光りをまじへ、『空想』の
造れる影にあこがれの
冒険の子ら幾何か、
美なるイタリヤうみいでし。」

百年重ぬる三のむかし、
我にも同じ冒険の
幾多の健兒、その中に、
支倉常長、東北の
英雄伊達の命をうけ、
遠くローマをめあてとし、

「バードレ」・ソテロ、イグナチス、
「フライ」・ヂエゴを導きに、
百の従者と一つ船、
纜ときし月が浦、
九月十五日の『月の暦』、
月の出汐に月が浦。

金華松島鹽釜の
名所に近き浦にして、
萬里の旅に門出の地
史上の驚いや深く、
今その記念東郷の
筆の石ぶみ岸の上。

(東郷大將の筆の碑)

所の縁と月の縁、
その夜門出の波の上、
一輪満ちて清光の
くまなき影を仰ぎつゝ、
「融」の曲や謡はれし、
そも想像の夢ひとつ。

千里萬里の海と陸、
夢はよなよなふる里に
歸りし長き旅の末、
つきし永遠のローマの府、
世界の一の大伽藍、
サンピイトロ側らの

法王宮の金碧の
光りに眩し、信の目は
またいやましに渴仰の
思ひの露をたたへしや、
一千六百十五年、
月日は同じ明治節。

明治維新にいたるまで、
支倉以來三百の
年にわたりてわれとわれ、
造りし牢にゐすくまり、
大愚の幕府心なく、
すべての施政みな姑息。」

あゝ惜むべく海國の
勇氣は枯れて民は皆
光明絶えて照らさざる
深海の底に眼の力
失ひはてし魚に似し、
その長眠のさめしあした——

世界の表に猛然と進む
三代今昭和、
一千九百三十年、
ロンドン海軍條約を
結べる三つの雄邦の
一つ東海日は光る。

寶劍明鏡また珠玉、
三つを竝ぶる象徴に、
見よ建國の史のはじめ、
垂れし教の尊きを
美なるイタリヤ友として
睦み親しむべからずや。

アジアの光り有色の
人種の先に身をぬきて、
四海平等人類の
睦みをつひの理想とし
進む日本を光榮と
美とのイタリヤ解し得ん。

二千の春をさかのぼる
むかし霸王の武略より、
次に尊き信の道、
更に三たびは美の道に
全歐洲を従へし
偉なるイタリヤ解し得ん。

彼れの統一わが維新、
ほぼ其の時を同じうし、
東と西と相照らし、
永く史上の花たらむ、
史上に高き勳業の
子ら似たるもの無からんや。

われの維新に偉なるもの、
たゞ一念の誠より、
命を惜まず名を求めず、
敬天愛人かきのこし、
子弟八千の牲となれ、
高士南洲先にたてり。

六十餘年曆移り、
大戦争のうみなせる、
（魔女の鼎に見る如き）
世界思潮の亂の中、
一死を堵して世のために
盡さんものぞ今待たる。

そのおほいなるもの待ちて、
太平洋のこなたより、
二千年前すぐれたる
ヴィルギリウスを生みし邦、
勇武竝に豊沃の
すぐれし邦をなつかしむ

（昭和五年・公元一九三〇秋）

四十三字歌

地に落ちし花びら集め本の枝に
無心のすさび結びしや
たが子有情の春暮るゝ庭。

敷石の隅より湧きし一群の
蟻は半死の蠅攻むる
空は暮春の風あたたかに。

風急に新緑の枝吹き渡り
西に流るゝ蓬々の

雲いま増しあす雨ならむ。

五城樓霞にこもるをちの嶺

幾重隔てゝとゞろくや

春雷數聲花まさに散る。

身を遠く天地初發のいにしへに

おかまくするや——夜半にたち

星の雲間を洩れいづる見よ。

玲瓏とつもる白雪見る如く

虚空はるかにうづまくよ

幾萬尺の雲の高嶺。

雲の嶺富士より高く大空に

聳ゆる影のいみじさや

瞬時の故にいよゝ尊き。

いみじきが故に脆きか、脆き故に

いよゝめづべし天外の

奇峯夏雲の凝り成す姿。

荒雄川流に沿ひて湧きいづる

鳴子、川渡、車湯の

ゆげのむらたつ玉造村。

荒雄川幾里の流をちこちに

湯氣たつ里の名もよしや
温泉村に夏忘るべく。

六月の東奥の旅夜にいり

汽笛さびしく陰風の

叫びと共に窓にひびける。

れきろくの夜汽車の進みとまる時

雨聲と蛙聲一齊に

湧きづる如く旅の耳うつ。

北の海北見の國に病める友

夏を避けつゝ身をわびて

断雲千里われ思ふとや。

焦ぎつくる光を浴びて川岸の

大石小石幾萬の

むれ難行の無言に並ぶ。

河馬の君夏さりくれば大水の

ナイルの岸に鼻孔を

鳴らして愛しき夫を待ちくらす。

土佐の沖汐吹き上げて風なきに

波を狂はす大鯨

フラルティションあらくやあるらむ。

海外拓殖の歌

世界にあまねく 日本をのぼし、

張るべく立て立て あゝわが男兒！

海よりあなたの 天地は廣し、

南米ブラジル またその一つ、

目指すは畢竟世界の平和。

アマゾン大河の 流れの區域、

日本の健兒を 迎へて待てり、

勉めて刈るべき 榮の基る、

ゆけゆけ自然の 恵みは豊か、

目指すは畢竟世界の平和。

第二の日本を 新たに拓き、

共存共榮 誠をいたし、

進まば誰かは 遮り得んや、

望みに溢るゝ 健兒の道を、

目指すは畢竟世界の平和。

旭日にほはん 櫻の花を、

海外はるかに 移して植ゑて、

異郷を飾りて 榮あらしめよ、

あゝわが美の國 日本の健兒、

目指すは畢竟世界の平和。

大鵬南に
翼をのして、
萬里の虚空を
翔くべき願、
仙臺瀋祖の
理想を今に
あらはし立たずや
東北男兒、
目指すは畢竟世界の平和。

滿洲の白頭山

滿洲朝鮮鄰れるほとり、
長白山脈北より南、
蜿蜒つらなる山また山、
中に秀いづる白頭山、
晚鴉埒に歸るとき、
鷄鳴朝を告ぐる時、
東の空に儼として、
滿洲平野見おろせる。
白頭山の胎いづる、

鴨綠、松花、豆滿江、
流るる末はひがし西、
一は黃海の黄なる波、
二は黒龍の暗き水、
三は明るき日本海。

黃海、黒龍、日本海、

之の名何等の聯想ぞ！

白頭山よ、いにしへは
紅焰黒雲虚空に吐きて、
虎豹の骸も焚かれしか！
今寂として噴火口、

湛ふ萬古の藍の水、

曲玉形まがたまがたの深き淵、

神祕を湛ふ藍の淵、

龍王潭の名もよしや！

見おろす滿洲、いにしへは、

金と元との古戰場、

更に清朝發祥の

もとは白頭山の下、

曰ふは誠か世の口碑、

愛親覺羅二百年、

中華四百の州統べし、

その興廢も夢のあと。

白頭山よ、來るべき、
明日の運命誰か知る？
風雨來りて山暗き、
龍王潭のさざなみや、
自然の默示、天の數、
民を愛して世を利する
人滿洲に君臨か？
すべては神祕藍の淵！

(昭和六年十二月二十日深更即吟、柳條溝事件後三ヶ月)

廟行鎮の三十六英雄

混成旅團の令下る——
『砲兵歩兵に先んじて、
廟行鎮の要塞を、
鐵條網を打ち碎け！
二千餘年に鍛ひ來し
日本の威武を世に示せ！』
令に應じて奮ひ立つ
久留米師團の工兵隊、
生還もとより期せずして、
悠々として盃をあげ、

笑を含み堂々と
死の塹壕をめざしゆ、
三十六の偉なる影、
昭和七年春二月
二十二日の朝まだき、
陰曆まさに十七夜、
残月西に傾けり。

少尉大島率ゐたる
勇士第一決死隊、
曉昏く霧こむる
地上這ひ行く十五人、
現世の命に幸ありて

敵に悟らる隙あらず
三班ひとしく爆發遂げて
微塵となりし鐵條魔、
躍進隊の進むべき
路三條を開き得て、
任務を遂げし大偉勳！

別に五條の路開く、
令を第二の決死隊、
受けたる二十二勇士、
「時こそ迫れ——死を犯し
進め」の令に進み行き、
敵の砲火に見る見るも

續き斃るる英雄兒！
部下の最期に東島
少尉悲憤の聲しぼる、
『最後の破壊！』聲と共に
火を點じたる破壊筒、
長さまさしく四メートル、
ひとしく共にかい抱き
弦を離るる矢の如く
はしる三個の影誰ぞ？
あゝ金剛の意志の前、
何もの敢て破れざる！
難攻不落の鐵條魔、
微塵に碎け肉彈の

三もひとしく空に舞ふ、
作江、北川、江の下に
鬼神も哭かむ壯烈の
爆音世界に鳴りわる！

あゝ黄海の西の端、
崇明島を右に見て。
揚子江口西に入り、
吳淞砲臺後にして
廻り行く黄浦口、
岸を上れば遠からぬ
廟行鎮よ！此日より
世界戦史に名を揚げむ。

東海昇る日の本を
外に世界の何國か
此壯烈の子ら生むや？
世界に響く爆音は
世界に高く宣じ曰ふ——
「君國のため甘んじて
笑つて死地に入る健兒、
數千萬人ひとつの心！
二千餘年の傳統に
勇武無双の日本國、
日本を敵となす勿れ！」

(昭和七年)

護國の靈

あゝ儼として上にあり、
昭々として天にあり、
常に滿つれど目に觸れず、
ただ精妙の誠より
親しく感じ悟るべき
群靈とこしへ此國護る。

九段の坂のへ、神聖の場、
靖國社頭にぬかづきて、
心の誠いたすとき、

魂髣髴と降り來む。

あゝ尊きはこれ誠、
至誠ひとたび致すとき、
人みな神に通じ得て、
無上の感謝湧き出でむ。

あゝわが東海二千餘年、
かくして此國榮え來る、
献身犠牲一々の
偉靈は長く此國護る。

(昭和七年正月)

伊達政宗卿

青春十七あらしに呼びて、
遂には奥羽の覇權を取れど、
思は南溟萬里のあなた、
英雄さびしく東亞の隅に。

觀瀾亭上眺むる波も、
心も澄みゆく名所の秋に、
大夢も覺むべし明月低し、
しづかに五更の鐘こそ響け。

瑞鳳山上春また秋と、
移りて三百日月はるか、
偉人を忍びて岸邊に立てば、
あゝ見よ廣瀬は流れて盡きず。

(註) 政宗卿は十七歳にして家を嗣ぎ奥羽に勇名を擧げ後年兩邊に志を酬せ
て遂に成らざりき。——第一節——
松島の観瀾亭は藩祖の設けしもの、こゝに晩年中秋の名月を買して詩を詠
じ結句に「道人閑撞五更鐘」——第二節——
瑞鳳山は藩祖の廟のある處、有名なる廣瀬川其下を流る。——第三節——

豊太閣

天日暗く亂れたる
六十餘州、双の手に
鎮めし力、桃山の
文華の春をにははして、
今も史上の花と照る。

弱きはたよる門閥の
虚しき飾あざわらひ、
卑賤の野よりたてる身の
一難ごとに榮増して、

占むる至高の臣の位地。

生ある限り奮ふべき

範を示して大陸に、

あらしを呼びし偉なるあと、

熱き血今も青春の

胸に湧かしむ、尊としや。

春秋うつる三百餘、

昭和四年の今日にして、

意義なからんやその讚美、

難波の春は夢なれど、

あゝ阿彌陀峯いや高し。

第二師團出征

第二師團の強き兵、

アジア大陸滿洲の

天をめざして奮ひ立つ、

奥羽の山河さらばいざ、

越の平野よ歸り待て。

國防の上、經濟の

うへ、もろ共に帝國の

主要のかぎの滿洲よ、

守るは重きわが使命、

東亞の平和肩にして。

日露の役のいにしへは
たゞぼうぼうの未開の野、
二十餘年の時経ちて
文化の光満ちわたる
東亞の寶庫わが恵み。

旅順を端に海城と
遼陽過ぎて奉天府、
鐵嶺あとに公主嶺、
長春北の端として、
滿洲軍の陣敷かん。

天地を沙にもうくの
滿洲あらし見る如く、
亂るゝ時ぞ魔を碎く
劍と砲とに東北の
男子の意氣を示すべく。

旭の旗のひるがへる
ところ、生命財産の
安きを得させ、共榮の
主義を奉じて、皇軍の
恩威等しく施さむ。

世界の史上あらたなる、

ページを染めし滿洲の
經營永く榮ありて、
東亞の光とこしへに、
わが帝國の春粧へ。

九千餘萬の國民の
第一線に躍り出で、
滿洲の野に屯する
第二師團の強き兵、
故郷の山河いざさらば。

滿洲獨立守備隊の歌

あゝ滿洲の大平野、
亞細亞大陸ひがしより
始まる處、黃海の
波うつ岸に端開き、
蜿蜒北に三百里、
東亞の文化進め行く、
南滿洲鐵道の
守備の任負ふわが部隊。

普蘭店を後にして、

大石橋を過ぎ行けば、
北は奉天公主嶺、
はては長春、一線は
連山關に安東に、
二條の鐵路滿洲の
大動脈をなすところ、
守りは堅しわが備へ。
黄塵くらく天を覆ひ、
綠林風に狂ふとも、
霹靂飛ばすわが砲火、
降魔の劍腰に鳴り、
炎熱鐵をとかす日も、

氷雪膚を裂く夜半も、
難きに耐へて國防の
第一線に勇み立つ。

内と外とのもろくの
民の環視の的となり、
恩威ひとしく施して、
來るを迎へ同仁の
徳を劍の刃に守る、
武人の操いや固め、
銃を枕の夜なくの
夢にのみ見る故郷の影。

あゝ十萬の英靈の
静に眠る大陸に、
遺せし勳承けつぎて
國威を振ひ、東洋の
永き平和を理想とし、
務につくす守備隊の
名にとこしへに譽あれ、
名にとこしへに榮あれ。

日本陸軍の歌

明治天皇御さとしの
五條の教かしこみて、
永く祖國の守りたれ！
旗も旭日のしるしなる
わが陸軍の健男兒。

降魔の利劍ふりかざし、
無道を撃てるわが歴史、
日清日露戦役の
先の光榮範として、

あゝ皇國のため奮へ！

奉天遼陽旅順口、

同胞數萬紅き血を

灑ぎしところ、今にして

其實結びて、滿蒙の

そら瞳々の旭日照る。

風雲さらに幾たびか、

東亞の空に暴れんとき、

進退ともに義によりて、

生きて至尊の爲め勤め、

死して護國の靈たらむ。

三千年の國の粹、

一兵一士ことごとく、

勇の權化と立たんとき、

正面に向ふ何ありや、

一もて千に當るべし。

東亞に永く百年の

平和いたさんわが使命、

これ文これ武備はりて、

世界惱ます魔に勝たむ、

あゝ皇軍は神の劍。

大楠公讃頌

至尊の蒙塵天日暗し、

六十餘州の義人やいづこ、

われ先づ捧げん匪躬の節を、

成敗利鈍は何かはあらむ。

元兇亡びて天日晴れし

建武の中興まさきの勳いさな

誠を盡して天地に恥ぢず、

神明高きに照して臨む。

姦臣あらたに叛旗を擧げて、

南風競はず、獻策成らず、

忠臣楠氏の碑の今立てる

ほとりに、あゝ君悲壯の最期。

一門ひとしく薫を留めし、

この方春秋次第に移り、

六百まさしく此日を數ふ、

英靈たふとし、萬古に朽ちず。

赤穂義士の讃

聞け玲瓏のしら雪に、
大地の浄土ときよまるあした
八百八町どよむは何か？
何か？ 元禄年十五。

雷の如くに起る聲、
大江戸こぞりて讚美の叫び、
隅より隅へと答ふる反響^{こだま}、
讃ずる何か？ 赤穂義士！

『赤穂の浪士四十七、

忠義の権化よ！ 日本の花よ！
冷光院殿無念のうらみ
はらしぬ！ 吉良を打ちとりぬ！

『義を金鐵と重んじて、

鴻毛比するも身はなほ軽く、
夜半の白雪血汐に染めて、
いま凱旋の道なかば！

『足あるものは行きて見よ！
日本の精華と此の年此の日
咲きでし義人の最後の姿、

足あるものは行きて見よ！

「赤穂の義士よ四十七、

嬉しやいろはの數にも叶ふ、

日本のほまれと耀く姿、

足あるものは行きて見よ！」

雷の如くにどよむ音、

八百八町隅より隅に、

大江戸こぞりて讚美の叫び、

讚美のその的赤穂義士！

元祿十五史となりて、

歲月流るゝ三百餘年、

三百餘年の移は如何に？

譽は今に世に薫る。

かへり見れば世の移り、

むかしは封建武人の操、

今はた世界のおもての日本、

理想は今に世に何か？

昭和の御代の子らよいざ！

金甌かけざる日本の姿、

日本の光を四海に照せ！

あらたの理想まのあたり。

昭和の曆を開きつ、つ、
理想は日に日に進みてやまず、
日本のつとめは世界の平和！
元祿遠し、あゝ昭和！

吉田松陰

四海の鼎かなと沸き立つ中に、
尊皇攘夷の雄叫たけこたかく、
靈火を點ぜし不朽の功いさ、
霹靂碎けし跡こそ偲べ
嗚呼松陰 高きその名や。

家國に許し、五尺のむくろ、
死生にかへざる心の操、
誠に動かぬ何かはあると、
奮ひし雄々しの跡こそ偲べ、
嗚呼松陰 高きその名や。

北畠顯家卿六百年祭

後醍醐天皇の延元三年五月二十日和泉の國に於て北畠顯家卿が戰死した。卿が神皇正統記の著者親房卿の長男であることは誰しも知つて居るだらう。當時の大忠臣として楠公が最も著名であるが、北畠父子の忠誠と偉蹟と後世に對する感化とは斷じて楠氏に劣るものではない。神皇正統記は親房卿が常陸の小田城に籠りて兵馬倥傯の際（恐らく參考の書が絶無の際に）職原抄と共に著述せるもの、後醍醐天皇の崩御に續き、後村上天皇が踐祚あらせられたが、まだ少年の御身であられたので、此二書を獻じて輔導の代としたものと思はれる。前者は筆を神代に起し、歴代の史蹟を叙してゐるが、其眼目とする處は、皇統の正潤を辨じ、治亂の因果を明らかにし、人君をして其踏むべき道を知らしむるにある。其正々堂々の立論は阿諛諂佞の曲學者を慙死せしむるに足る。『神は人を安くするを本誓とす、天下の萬民は皆神物也、君は尊くましませど、一人を樂ましめ、萬民を苦しむることは天も許されず……わが國は神明の誓著しくして、上下の分定めり、しかも善惡の報明かに、因果の理空しからず、且は遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て、將來の監誡とせらるべきなり。』（第八十七代後醍醐院のくだり）

顯家卿は花園天皇の御宇、文保二年に生れ、享年僅かに二十一歳で壯烈の戰死を遂げた。大日本史卷之一百六十六（列傳第九十三）は卿を傳する。左に抄す。

『元弘元年參議に任じ、左近衛中將となる。時に年十四、是春帝は中宮及永福院と共に藤原公任の北山莊に幸して花を觀、帝親しく笙を吹き、顯家關陵王を舞ふ、容姿閑雅、俯仰節に中る、觀者嗟賞す、舞畢りて退かんとするや、帝召還して更に一曲を舞はしめ、物を賜ひて之を賞す、十七歳出でて陸奥出羽を鎮す、建武元年功を以て從二位に叙す。延元元年奥羽の大軍を率ゐて西上し、琵琶湖より延曆寺に至り、諸將と共に道を分ちて尊氏を攻む。顯家二萬人を以て粟田口より火を放ちて進む、尊氏之を望みて曰く、北畠殿來る、我自ら當らざるべからず、尊氏敗走す、顯家先登し、諸將繼ぎて進み、大に之を敗る、尊氏走りて九州に落つ。顯家ついて勅命を奉じ、再び奥羽に下り、東國の經營

に當る。五月尊氏大軍を率ゐて京を攻む、楠正成湊川に戦死し、帝比叡山に幸し、勅使を顯家に下して再び西上せしむ、されど南風遂に競はず、延元三年敗れて散卒を收め、男山に據る、高師直來り攻む、顯家城を出て戦ひ敗れ、二十騎を率ゐ、圍を脱して吉野に奔らんとす、敵兵合圍、竟に陣に歿す、時に年二十一、從一位右大臣を贈る、(本文の意を取つて任意に抄す)

神皇正統記の著者は最愛の長子の最期を左の如く述べる。

『それより所々の合戦數度互に勝負侍りしに同五月和泉の國石津といふ所にての戦に時や至らざりけむ、忠孝の道こゝにて極まりはべりにき、苔の下にも埋れぬものとは、ただ徒らに名をのみぞ止めし、心憂き世にも侍るかな』(太平記には安部野)

昭和十三年十月二十日前後一週間に亘り福島縣伊達郡の靈山及び福島市に於て顯家卿六百年祭が盛大に行はれた。左の一篇は卿に對するわが崇敬の一端を述べたものである。

元弘元年花匂ふ

十四の春に、龍顔に

咫尺しまつり、勅に因り、

舞へる蘭陵王の曲、

その入陣の曲に似て、

三歳の後、陸奥出羽の

高き二州の鎮守職、

關山千里雲を分け、

金枝玉葉いただきて、

奥羽の空に南朝の

皇威の光燦爛と、

輝かしけむいにしへよ、

わかき美貌の名將を

六百年の後偲ぶ、
ああ靈山に靈朽ちず。

兩度奥羽の大軍を
率ゐて進む幾山河、
武辨の門にあらなくに、
英武豪勇比類なく、
姦雄遂に敵し得ず、
頭を抱へ旗を捲き、
寒潮岸を去る如く
九州さして落ちにけむ、
それも一時か天の命、
南朝遂に光無く、

雲は滂澹、風泣ける
安部野の原に紅玉は、
無慚や碎く、人の世に
享年わづか二十一。

英靈かくて世を辭して、
天の寂光の郷に入る、
六百年のいにしへの
青史を開く夜半の窓、
青燈そゞろまたたきて、
風しづまりて月黒し、
壯烈忠武凜として、
颯爽として花匂ひ、

遺風薫ずる將軍の
名残の譽れ、東北の
天の一角あをとめて、
行客つねに襟正す、
ああ靈山に靈朽ちず。

第
二
部

日本精神の歌

世界の歴史に比類を絶ちて
金匱缺けざる日本のほまれ、
日本の力の偉なるを見ずや、
拂はん妖魔を劍の影に、
拂はん妖魔を劍の徳に。

光明暗黒はげしくまじる
現世の思想のみだるゝもなか、
日本の人民いづくに向ふ、
正さん心を鏡に照し、

正さん心を鏡の徳に。

二千の春秋ひがしの洋に
ひそみて新たなの時世にたてる、
日本の使命の高きを知るや、
玉なり平和は四海の願、
玉なり平和は四海の理想。

武士道の精華

尊き皇祖の教は高し、
教の象徴しやうしやう 三種の神器、
その一 百錬こりなす劍。

妖魔をつんざく日本の劍つるぎ、
劍はかたどる 日本の精華、
千歳朽ちざる士道の光。

あゝわが武士道大義によりて、
琢みがきし鍛へし美妙の精華、

旭日に咲き照る花にも比せむ。

あゝ花いみじく旭日あきひにほふ、
旭日の此の邦とこしへ榮はえよ、
士道の精華は萬古に朽ちず。

奮へ國民

亞細亞大陸聯盟の
高き理想を胸にして、
千歳長き光榮の
道たどり行け、ああ日本。

東海の上燦爛と
照らす旭日の出づる國、
雲霧拂ひて萬邦に
限なき光浴あびしめん。

大道常に明かに、
鏡の面に譬ふべし、
仁と勇との象徴は
玉よ劔よ、我が神器。

皇祖皇宗世々のあと、
傳ふ一系三千年、
四海は麻と亂るとも、
我は金剛の基あり。

民一億の同胞の
心一つに、天職の
高き遠きを畏みて、

無窮の旅にああ進め。

起て、日本國民

「艱難 汝を 玉成せしむ」

千歳朽ちざる たふとき言葉

日本國民 今こそ 誦せよ、

A B C D 合圍の時ぞ。

鏡と劍と璽との教、

奉じて 仰げる 春秋長し、

日本國民 今こそ 奮へ、

A B C D 合圍の時ぞ。

弘安むかしは時宗ありき、

昭和の 今日 何人ありや、

日本國民 祖先を思へ、

A B C D 合圍の時ぞ。

興亞の使命は われらに下る、

奉公 いかでか身を賭せざらむ、

日本國民 今こそ 奮へ、

A B C D 合圍の時ぞ。

太平洋 今 太平ならず、

狂瀾怒濤は 山より高し、

日本國民 今こそ 奮へ、

A B C D 合圍の時ぞ。

(昭和十六年夏)

理想日本

尊き象徴 三種の神器、

仰ぎて三千 春秋しゅんじゆ移り、

昭和の今の世 昔の詔みこと、

八紘一字の理想に進む。

日本國民 今こそ勇め。

見よ見よ十億 アジアの種族、

新たに目め覚ざめて われらにたよる、

饕餮飽くなき 非道の慾に、

耽りし 英米尾を捲き遁る、

日本國民 今こそ躍れ。

文武に秀でし 名將むかし、
圖南の鵬翼 歌ひしところ、
星羅の群島 緑の波に、
ほゝゑみ われらの支配を仰ぐ、

日本國民 今こそ奮へ。

さむれば果敢なき春夢しゅんむの如き。

東西霸王の威力は淺し、

史上に未曾有の 皇道榮え、

四海の平和の 基とならむ。

日本國民 今こそ進め。

正義の鋒先

暗雲低くも地上に迷ひ、

霹靂高らに虚空に叫ぶ、

太平洋今その名は空し、

英米あらびて寄するを見ずやー

アジアの同胞十億餘萬、

かれらの飽くなき非望に悩む、

時なり、日本をたけび立ちて、

無道を攘はん日は今來る。

A B C D 包圍は何か？
一億一心われらの努力、
鐵壁微塵に碎かはやまじ！
祖宗の神靈われらを助く。

山なす艱難來らば來れ！
海なす災厄何かはあらむ！
正義の鋒先無道を懲す、
最後の勝利はまさしく我ぞ！

大詔新たに戦宣す、
世界の歴史に東亞の民の、
興隆記せる第一ページ、

開けり、大東あゝ日は高し。

(昭和十六年十二月八日)

大東亞戰爭序曲

世界の耳目を聳動せしめ、
太平洋また南洋かけて、
霹靂とゞろき電光かけり、
皇軍一たび雄たけび立てば――

一瞬忽ちハワイの港、
眞珠灣上群がりゐたる
米國艦隊こぞりて亡ぶ、
航空兵力こぞりて亡ぶ。

A B C D 包圍の巨魁、
詐謀と恫喝われらに迫り、
傲然東亞をおどせる彼れの
太平洋艦こぞりて亡ぶ。

同じく英國東洋旗艦、
プリンスウエルス無上の威力、
最新最鋭誇れる艦も、
僚艦レパルスもろとも亡ぶ。

プリンスウエルス三萬餘噸、
威風は堂々東亞をめざし、
萬里の波濤をわけしは昨日、

見よ今マライの沖合沈む。

見よ、見よ、開戦僅かに三日、

英米艦隊ひとしく亡ぶ、

まさしく是より我が大東亞、

戦争序曲は始まるべきぞ！

飽かざる強慾アジアをなやめ、

悪運久しく榮えし魔群、

斥け攘ひて新天新地、

拓かむ、旭日あゝ今昇る。
(十二月十九日)

少年航空兵

ああわが少年航空兵、

ああわが紅顔美少年、

天上高く機に乗りて、

飛電の如くまつしぐら、

敵艦目がけ降り來て、

その砲塔に、煙突に、

轟雷投じ艦と共、

五體微塵に碎き去る。

金甌たえて缺くるなき、

大日本の三千の
春秋長く鍛へ來し、
忠肝義膽今ここに、
この燦爛の花と咲き、
この壯烈の果と結ぶ、
世界萬邦いづくにか、
他に又かかる例を見む。

昭和七年春二月、
廟行鎮に壯烈の
火を點じたる破壊筒、
力合はせてかき抱き、
難攻不落鐵條の

網をみぢんに身と共に、
碎き棄てたる三勇士、
その忠魂は歸れるか。

ああわが少年航空兵、
ああわが紅顔美少年、
忠勇無上！ 皇國の
ほまれ朝日にほふ花、
花のあらしに散る如く、
敵艦ともに碎けさる
その壯烈よ、鬼神また
泣くべし、何の言句もて
その大功を讃せんや！

A B C D 包圍陣、

その鐵壁を粉みぢん、

つんざき砕く大偉勳、

四海八紘一齊に

その目その耳聳動し、

をのき震ひ皇軍の

無上の武威にひれふしぬ、

ああわが少年航空兵！

ああわが紅顔美少年！

香港陷落

中華を毒せし阿片の煙、

阿片を本とし交へし干戈、

惡運榮えて無道の敵は、

香港奪ひて牙城となせる、

それよりまさしく百年たてり。

見よ今天運あらたに歸り、

アジアの民族救ひの爲めに、

日本皇軍雄たけび立ちて、

進めば難攻不落を誇る、

英軍忽ち白旗を掲ぐ。

大英！ 汝の未來はいかに！

汝の東洋艦隊砕け、

汝の要害次第に落ちて、

汝の悪運ゆく／＼盡きん、

見よ今香港白旗を掲ぐ。

(十二月二十五日)

A B C D 包圍陣敗る

恫喝威嚇を唯一武器と、

頼めるA B C D崩る、

見よ見よ燦爛、朝日は照りて、

魔群のふためき逃げ行く姿。

ペナンと香港まさに落ちて、

今またマニラも其あと倣ふ、

無双の要塞マライの端の、

シंगाポールも近くに落ちむ。

トラファルガーより一百餘年、
世界の七つの海わが領と、
誇りて閃くユニオン・ジャック、
見よ今汝の没落迫る。

西半球上モンロー主義を、
唱へて東亞に同じき主義を、
拒める非道の飽くなき慾を、
今こそ悔いずや、アメリカ汝！

神兵一たび天より降り、
皇軍一たび怒濤を驅れば、
A B C D 包圍は碎け

アジアの興隆史は今展く。

(昭和十七年一月四日)

シンガポール陥落

大英國の凋落を、
世界歴史の轉換を、
告げて殷々曙の鐘、
十億アジア民族の
長き眠をさますべく、
シンガポールは今や落つ。
天佑つねに豊なる
國安けくと、しろしめす、
至尊の御言載きて、

忠肝義膽たぐひなき
わが皇軍の武威により、
世界未曾有の功成る。

凱歌轟く、ああ勝てり、
金甌絶えて缺くるなき
大和島根の岸うちて、
碎けて歸る沖津波、
波にさながら髣髴の
大敵碎け影も無し。

感謝捧げよ、ああ勝てり、
勝ちて兜の緒を締むる。

一億一心、民奮ひ、
大東洋に南洋に
腫々のぼる大旭日、
旭日の國は萬々歳。

(二月十五日)

樂土を拓け

扶搖萬里の風待つと、
文武秀でし英雄の
歌ひしところ、南洋に、
大東洋に一齊に、
今こそ仰げ旭日旗。

ボルネオ、セレベス、ニューギニア、
ジャワ、スマトラの列島の
更に南におほいなる
オーストラリヤ、疾風に

草の靡くが如く伏す。

時は轉じて世は移る、

三百餘年西歐の

暴威のもとに奴隸の身、

悲憤の涙のみこみし

諸族今こそ夢さむれ。

三千餘年邦舊く、

命はあらたの日本の、

その導きに八紘の

億兆ともに處得て、

樂土を拓け大東亞。

(二月十三日)

林子平先生を偲ぶ

千古空しき海國の

守りの道を獨り見て、

世を警めし高き聲、

「日本橋の下の水、

四海に通ふ、思はずや！」

海防説きて生靈を

濟ふ雄々しき志、

心きざみて骨削り、

作りし名著、「兵談」の

板木は焼かれ身は囚徒。

寛政五年君逝きて、

こゝに一百五十年、

今大東亞戦争に、

世界の耳目轟かし、

わが海國の威は振ふ。

威の振ふ時、おほいなる

わが先覺のいさをしを、

偲ばざらめや、六無齋

子平先生かんばしく、

名は永遠に朽ちざらむ。

(昭和十七年六月)

鈴木三守英靈頌

世界歴史に永遠に

記すべき昭和十六の、

冬十二月八日朝、

曉いまだ目ざめざる

眞珠灣上！

轟雷！

閃電！

見よ第一次攻撃隊、

雷撃隊は名の如く、

アメリカカ主力艦隊に、

雷の如くに落ちかかる！
隊長は誰れ？ 鈴木三守^{みもり}、
青春の盛り二十七。
空に向けたる敵艦の
砲火、雨よりなほ繁き
最中はげしく、その機體
ゆるをあやつり敢然と、
敵艦めがけて發射せる
魚雷まさしく降魔彈！
ああ入神の腕の冴え！
機體そのまま敵艦に
雷の如くに體當る、
まさに其時轟然と、

アメリカ主力大艦の
舷のかたへに炸烈の
魚雷まさしく降魔彈！
天に沖して立ちのぼる
眞白き凄き水烟、
鈴木隊長英靈の
天に昇ると見るばかり、
ああ青春の二十七、
鈴木三守はかく逝けり。
文武すぐれし名將の
むかしの領土、宮城縣
石森町に生享けし
鈴木三守はかく逝けり。

ああ君國に報ひ得て、
若くて逝ける天の寵兒、
鈴木三守はかく逝けり。

第三部

——三大海戦歌——

劇歌 元軍覆滅

第一章 燕京朝廷

忽必烈

何に！ わが使者を斬りしとな！

言語道斷！

恐怖のために狂へるか！

もはや此の上棄て置けじ。

分を知らざる小さき東夷、

小さき島々、東海の

うへに散ばるちさき邦、

民は勇猛と昔より
曰ひ傳ふとも何かあるべき！
螳螂斧を揮ふとも
われの龍車にいかで當らむ！
もはや此の上棄ておけじ、
天兵十萬とくかけ向へ！

臣 甲

かしこみまつる大御言、
御言の儘に早急に、
準備整へ候はむ。

有史このかた比ひなき、
わが大蒙古國、天領の
北はオロシヤ、ポーランド、

西は黒海、ホンゴリア、
四百餘州は、脚の下、
南は印度、五天竺、
東は高麗、新たに降る。

臣 乙

四海をおほふ大威光、
知らば忽ち伏すべきを、
知らざる故にあらがへる！
笑止！ 妄りにあらがへる！
蛇におちざる盲者のたぐひ、
飛びて火に入る夏の蟲、
天兵一たび向ふとき、
一瞬忽ち碎くべし。

忽必烈

さなり、天兵向ふとき、
一瞬忽ち碎くべし、
千波萬波のうねりひく
漫々の海埋むまで、
舟千百の楫揃へ、
天兵十萬劍戟を、
砲火を備へかけむかひ、
またよく中に小邦を
微塵に碎き平らげて、
大燕京の宗廟の
前凱旋の式あげよ！

第二章 筑紫の望樓

看守 甲

澎湃として空涵す、
漫々たりや、東海の波、
しづまるときは、玲瓏の
鏡に似たり、荒るゝ時、
怒濤は山と高まれる、
おほいなる哉、わだの原、
天孫高く高千穂の
嶺にあまりのこのかたに、
金甌たえて缺くるなき、
秋津島根の岸洗ふ。

看守 乙

秋津島根の岸洗ひ、
寄せて碎けて歸る波、
波にさながら髣髴の、
蒙古十萬水軍は、
程なく我に寄すべしと、
傳へもてくる通商の
その消息は頻々と、
耳を拍つなり、殷々の
雷遠く鳴る如く。

看守 丙

大敵寄する遠からじ、
こゝ望樓の上高く、
日夜守りの任重し、

今いにしへの防人の
歌ぞ忍ばる！

『すめろぎの、遠のみかどの、
しらぬ火の、つくしの國は、
仇守る、おさへの城ぞ、
大君の、命のまにく、
ますらをの、心を持ちて
あり廻る』

そのいにしへぞ忍ばるよ。

看守 一同

あゝ大敵は寄せて來ん、
あゝあゝあすの運命は、
晴か曇りか、大荒れか、

暗は沖路の遠きより、
暗は岸邊に今迫る。

第三章 鎌倉幕府

幕僚 合唱

あやにかしこきすめろぎの、
あやにたふときすめろぎの、
はじめ給へる秋津島、
瑞穂垂穂の大八洲、
豊榮のぼる日の御國、
未曾有の危難寄せ來る。
波のあなたの唐土の、
四百餘州を併呑の、

蒙古大敵襲ひ來る。

時 宗

とくく 來れ大敵蒙古！
血氣にはやり深慮無く、
二たび三たび彼の使者を、
斬りしが故に斯くありと、
いふは何者？ 愚か也。
使殺すもまた來る、
殺さずとも又來る、
豊葦原の秋津國、
併吞せずばやまざらむ、
非望誰かは悟らざる！
無慚や、最期、崖山に

亡び失せたる南宋の
聞く痛はしき運命を、
我に加へんその非望、
火を見るよりも明らけし。

幕僚 一同

いみじき仰せ、執權の
御言は大地たゞく槌、
げに／＼彼れの大非望、
火を見るよりも明らけし。

時宗

男兒生れてこゝにあり、
祖宗の力、神佛の
冥護によりて、執權の

職を奉ずる我れ時宗、
北條時宗こゝにあり、
國の精髓、名にし負ふ
鎌倉武士の範の身ぞ、
鞠躬盡力たゞ死あり、
いともかしこし、一天の
萬乗の君、身を以て
此國難に代らむと、
かしこし伊勢の大廟に、
神代このかた濁りなき、
五十鈴の川の岸の邊の
あやにかしこき大廟に、
たふとき祈願こめたまふ。

かしこ一天萬乗の

君の祈願ぞ、臣の身は

いかでか此に倣はざるべき！

いかでか此を學ばざるべき！

幕僚 一同

かしこ、一天萬乗の

君の祈願ぞ、臣の身は、

いかでか此に倣はざるべき！

いかでか此を學ばざるべき！

時 宗

血潮の眞紅、筆染めて、

心をこめて寫したる

尊き諸經數々かずは、

金剛、般若、圓覺の

尊き諸經一切は、

國土安穩祈願のため、

寫し了へたる經典の

一畫、一字、一文句、

一偈、ひとしく神兵と

化して大敵打ちはらへ！

斷行すれば鬼神も避けむ、

秋津島根の大御民、

國をこぞりて一心に、

寄せくる蒙古打ちはらへ！

四百餘州をこぞり來る

かの大敵をうちはらへ！

臣 甲

嚴命かしこ、みな奮へ！
命は鴻毛の輕きなり、
義は金鐵の重きなり、
一たび生を享けながら、
亡びぬものは絶えてなし、
いつしか亡び行くべくは、
たゞ光榮の死を遂げよ！

合唱

やまとますらを

やまとますらを！

奮はざらめや！

やまとますらを！

斷行すれば鬼神も避く、
四百餘州をこぞり來る、
敵の大軍攘ふべく、
奮はざらめや！

奮はざらめや！。

第四章 筑紫の沖、元軍の本營

蒙古の將軍 甲

磐石^{ばんじやく}打ちて累卵を
碎く如しと思ひしを、
ちひさき邦をまたたくま、
碎き得べしと思ひしを、
げにも勇猛の民なりけり、

げにも不敵の民なりけり、
わが堂々の戦艦に、
わが整々の大軍に、
向ひ來れる螳螂の
力あまりに不思議なり。

蒙古の將軍 乙

げにもあまりに不思議なり、
轟然として空震ふ
わが石壁に碎かれし
舟より躍り、わが舟に
乗り入る勇氣火の如し、
劍戟振ひ雄叫びて
魔神の荒るゝ如くなり、

死滅恐怖の何ものも、
彼等は絶えて知らざるか？

蒙古の將軍 丙

げにもあまりに不思議なり、
江南の軍十餘萬、
高麗、漢の軍四萬、
海を壓して寄せながら、
絶えて陸上侵し得ず、
戦すでに二ヶ月に
あまりて、糧は早や乏し、
疫癘はたまた恐るべく、
わが大軍を惱ませり。

合 唱

勝算遂に期し難し、
續きて更に攻むべきか？
大軍もとに引くべきか？
いかになすべき？
いかになすべき？

第五章 元軍の覆滅

水兵 甲

天の一角湧き出でし
魔王の如き黒き雲、
忽ち頭上おほひ來て、
晝は俄に夜となる。

水兵 乙

あら電光のものすごさ！
あら雷鳴のおそろしさ！

水兵 丙

天地ひとしく晦冥に、
大雨は瀧と降りしきり、
狂へる颯風襲ひ來て、
舟と舟とを繋ぎたる
鐵鎖忽ち吹きちぎる。

水兵 丁

見よや怒濤は舟の上、
山の如くに崩れ來て、
あらゆる物を洗ひ去る。

水兵 合唱

波に捲かれて、同僚の
數萬みすく、亡び去る、
あゝら無慚や、舟は今
奈落の底に沈むべし。

第六章 筑紫の歡呼

合唱

あらうれし、あらうれし！
戦ひ勝てり、あらうれし！
金甌絶えて缺くるなき
大和島根の岸うちちて、
碎けて返る沖津波、
碎けて沈む十萬の

胡軍残りはいくばくぞ？
見よ東海の空晴れて
日は腫々と昇り出づ、
豊榮のぼる大旭日、
旭日の國は萬々歳！

(凱旋曲につれて「ウイ
ヘルムテル」の序曲の「フ
イナール」の如きもの)

日本海々戦の歌

海なり晴なり夕なり。
夜摩天上の瑠璃の宮、
黄金の塔、瑪瑙の樓、
鏤め粧ふ百寶の
色を、微妙のひらめきを、
東海今見る暮の榮、
千波萬波のゆらめきに
鷗の羽も染まるまで、
水平線のひくきはみ
一面さながら虹霓の

焰と溶くるわだつうみ。

蜃樓の粧天の一方
崩れて波に入る如く、
その波染むるくれなるの
あとも流轉のうたかたや、
漣漪は眠る花に似て、
次第にこむる霧の海、
聖殿深く錦繡の
帳のおほふ大鏡、
中に籠れる靈ありて、
夕しづかに立ちあがり、
未來の命を宣るごとく、

莊嚴神祕の影凝らし、
うづまく暗に隠れ去る、
大海原のしづけさや。

暗濤へだつる三百里、
潮あしたに合すべき
二つの水師、西東、
一つ黄海の沖の南、
懸るは「破壊」のとき劍、
一つ對馬の沖の上、
近きに笑むは「光榮」か、
渦巻く潮吼ゆる波、
喚びぬ「戦今近し

龍王ちひろの淵出でて、
鯨鯢百千の群狂ふ
あらびにまさる跡見よ」と。

渤海遠き北の天、
波いま眠る旅順口、
あらしも凍る冬二月、
八日夜半の波切りて、
電光の羽雷艇の
飛びしこのかたいくそたび、
鬼神も泣ける壯烈の
跡ぞ、——陸には武の權化、
節は稜々の秋の霜、